

うちなあ点描
第百九十九回

「琉球建築」と日本・中国とのかかわり

文・平良 啓 *Hiromu Taira*

「琉球建築」の 学術的評価

伊東忠太は大正十三年に
 沖縄を訪れて各地の建造物

を調査したのち、次のように述べている。「(前略)琉球建築に四つの特色のあることを論じた。その第一は

それが著しく古調を有すること、日本内地に比して常に数百年の時代の食い違いのあることである。第二は琉球が小さい島国であるにも係らず、その芸術がノンビリした気分で少しも萎縮した感じのないことである。第三は琉球芸術が一面に於て特殊の趣味を發揮して居り、精巧であると同時に優美であることである。第四は琉球芸術を構成する元素は多様であつて、日本、支那以外に安南、朝鮮および南洋系の感化があるかと思われることである。(後略)」「(琉球―建築文化―)昭和十七年十一月発行 東峰書房)。

また、昭和九年から翌年にかけて来沖し、県内の建造物を精力的に調査した田辺泰は次のように述べている。「(前略)要するに琉球建築は、民族的にはかの地に日本建築を打ちたてたのであつたが、地理的に本土と離れ、かの地特有の氣候・風土による独自の緩慢なる発展をなし、さらに中国明・清の建築様式ないし技法を加えて、濃厚なる地

方色を發揮する琉球建築が生まれたといふべきである。それゆゑ琉球建築研究に際しては、日本建築的要素・中国建築的要素および氣候・風土的要素などそれぞれ分析的に観察することの必要であることはいふまでもない。(後略)」「(琉球建築)昭和十二年 座右宝刊行会 昭和四十七年改訂版)。

日本の建築史学の泰斗である両氏が琉球建築を中央の建築界で発表したのは意義深い。このことを契機に、琉球建築は日本の一地方の建築という枠を超えて、学術的にも注目されるようになった。

「琉球建築」の魅力と 今後の研究

琉球建築にはさまざまな建築様式が混在している。例えば、首里城の守礼門は、中国建築の三間牌樓の影響を受けつつも、柱と貫などの構成は日本建築の影響が見られ、下層の屋根を柱が貫通し、上層の屋根を支えるのは守礼門独特の形式である。首里城正殿は、基壇

と石高欄、龍の裝飾などは、中国建築が反映されるも、正面の唐破風は明らかに日本建築。ハの字に開いた石階段や柱に見立てた大龍柱は正殿のオリジナル。窓上の霧除や瓦などは琉球建築の特徴を備えている。

琉球建築の魅力は、日本と中国など、アジアの建築と沖縄で育まれた建築スタイルが融合し、開放的で人に優しく、何とも言えない安心感にあると考える。

ただ、調査・研究については、古民家は以前から調査・研究が行われているが、その他の分野はそれほど研究が進んでいない。日本本土に比べて往時の建物がほとんど残っていないことで実学がなかなか育たないものである。首里城復元を契機に、歴史的建造物の復元や修理が推進されており、研究を深める好機でもある。先人たちが極めた建築とその周辺の環境特性を読み解くことで、地域の人々のコミュニケーション回復や、省エネルギー対策の在り方などを考えるきっかけになると思われる。



昭和の大修理後の首里城正殿。写真はガラス乾板のプリント。原板は早稲田大学創造理工学部建築学科建築史研究所蔵